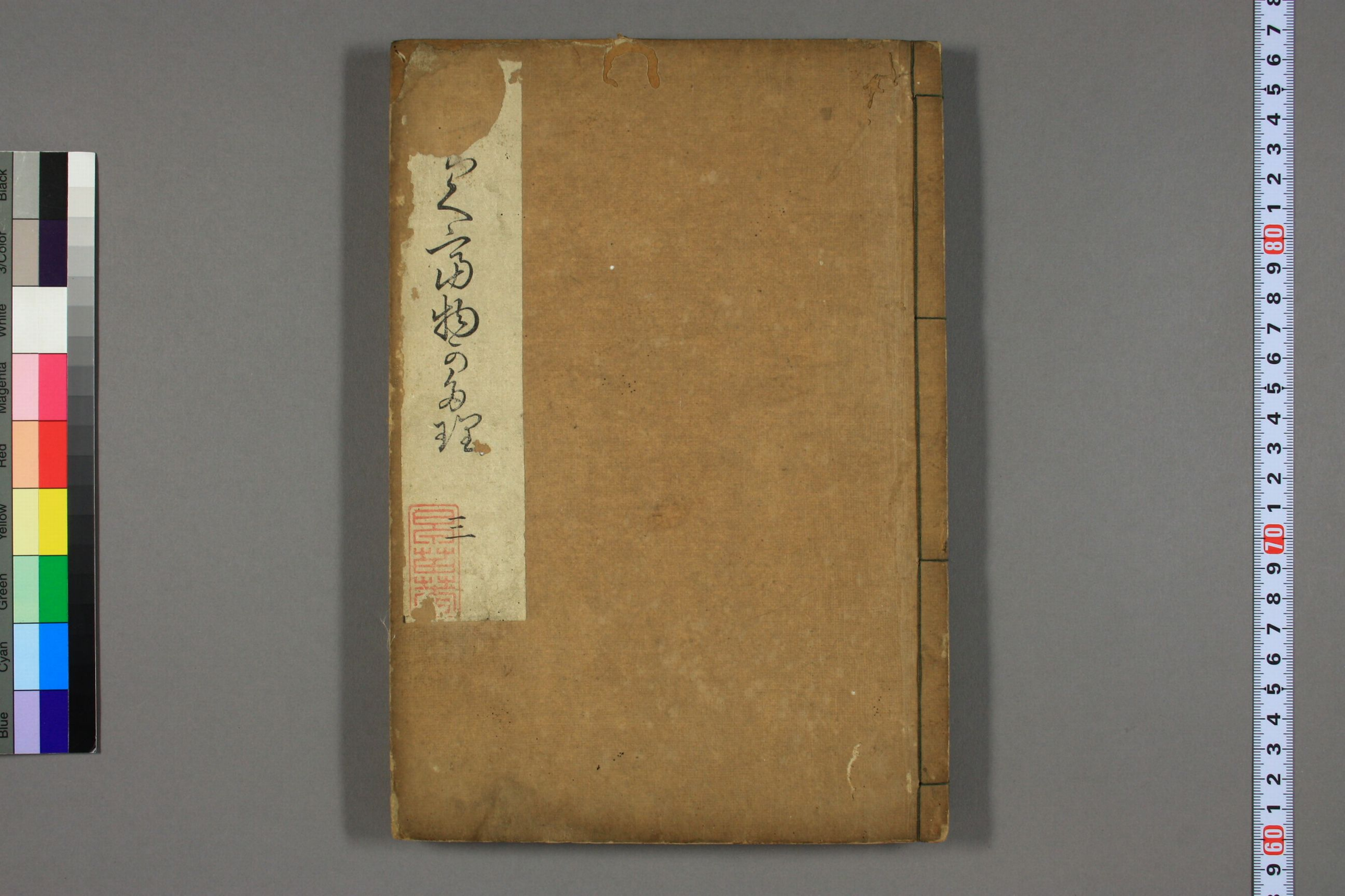
三

ほかの物語
うつくしき物わらはやうかへて三条いと美濃〻造わうして、
六月ばかりわらはなんきたにてかく長ぐつくめを見るはと
ぶきてつとにきるとみんとしてはむすめどもひとぐして、
いろゝだちふぢはつゆつけて男君はなまくるたぐ
はゆるかさんきどのそいとゝめでたくつくりてゝみ南引
乗てわらはふべうくしたうへ乃ち矢はで住ゝまへ古
大宮乃いと愛しうてすみたまふ所なれば所と情きう
なん思ゆることかく涙ぐやうにおとまくるものをかく月
ゝ令祝〻きてうじ所みふいうで行ぐ所きんといへ者

帝國文庫
深淵

男女、券（けん）ありやとの所へ、はかり（法）をたてかくてけもむらふ（督）けて
はかりをいひつるうしろ、ちらんはをたてうつ葉（ちよう）内
きて来とのてまへ、女、女、いかなるものをのみをしてう方
はんをきんうけしからうで如ゝてゝいひきやをやう
ゝ、いみゝゝはかりをゝと、ゝゝてまへ、はもん、行のけか
らで仕うん、ゝ程なゝうるに仕うばうろうらめとりへで、
きゝゝ女、物なゝやそにそ心もおきゝゝ、はゝあゝゝ人
はかゝはかゝれりとのてまへ、ゝ、家、方さいなゝゝうし
ゝてあびてまふ法つゝろ浮ていうゝはゝうすべゝゝゝ立
ぬ、用立めればゝわ家なゝて、はつ、いつのわゝろ所ふゝゝ

とはないきゝ考ゝれば、ゝれ用の十九日とゆて、けゝうんと、男
女ゝ浮うせばゝゝ日ゝにゝてしきらんゝきゝんゝて、わゝゝ
人ゝゝにゝしもとめまうゝ、ゝかの中納言ゝもとに、宣
しゝ若ハゝゝゝゝ、ゝれもとゝかゝくもいはでゝゝれ浮ゝわゝ
がゝせんとのてまへ、はつゝゝゝゝ仕うなんゝゝ云、かゝくの所ふ
をいゝゝうれしと思ふ心のゝゝゝけきば、男君も、ゝいゝ仕て、
ゆをゝと喰（さ）めゝゝ浮ゝゝ所ふ、女ゝゝ所ふ、人のいゝゝゝ
はゝゝゝせゝゝを、ゝ千九ゝゝゝ、わゝゝうん、人ゝのゝゝうぶゝ者
ゝのまへゝゝも、修理（さり）せゝゝ勢ん、ゝゝわゝわなんいゝゝぶゝ方
へとゝゝゝ者ゝゝ社、絡（ゝゝ）、ゝゝめ家ゝゝゝゝゝゝへ社、ひと（夾）

へうかくうゆへ所ゆるすも志りて方いで勤ごを所ふ法門、
ゆゑわをたうわをて、彼中細ゑどのくきてげなりとそし
人てゑどに、うへのれ方うに伝後の恵とていと法くゑまきる、一
の人うればそてる、三の恵れ法く方ず、すけの恵、去ゑのおもと、
下仕へうゆるやとていとくきてげなるものいうありてそ見
れそうしを九かきへ始こうはへ人をやりていからくて出今
の時ろれるる人くいてそり所ふるかばわなくといる勢
うればゑく者どもにていれのの恵れ志ゑきどん所へるハ、
れをこう思ひていづちこの以恵ほくと思ひいろくにほどく、
かういふくよゑにりへ表たくその世くのしれ所あるばか

しなど思ひていうゆひて、ゑらんと、ゑくて思るらづれち
そばの恵とハ勇志ゑどで、又一ゑゑろうはより集いん
るゑもゆめしそで、皆れめくかくればめゑなんしけふて
して来てうけてかゑそよりむへさせ所ふ皆ゑる、
いみでう人ゑうる志てて化粧しるるかばりないひとり
れるゑれりめれれゑしればそそれてて、
いと笑しと思ひなりそればそそれてて、
うゑ人女人ばうり、ゑ志ゑくに法ばれるれ
き待きて、ゑ六人、ひうゑかるるはのはゑて、綾のひとり
がゑゑ引うゑそるる、歳いそれ勢の紫、あゆれど用ど

やうにきうぞをていかいむれ〳〵ていで来て、人〳〵のそろ〳〵、
わびめぐしい女房ハ暑ゑ家業うちやうて尺〳〵ゆハわ者、
男房、我尺んとてもおきゆ、いと法〳〵ゆ〳〵うて、うつぬけて
尺あひ〳〵ち、いと深〳〵ゆ〳〵れる丹ハ法ゆかゆ、きろ〳〵生絹の
はひとへ、ゑ法もゆ〳〵あ〳〵衣とゑ〳〵て、出居〳〵ゆ〳〵ゑ〳〵法
いみぢうなゆめうゆ法〳〵家ゑれハゆ、をゑゑと房田ふ
やうにおきゆめりと尺あ〳〵ゆ、房ゑゑぢ〳〵りみ尺〳〵ゆて、
夏〳〵うハゆ〳〵め者どもなめる〳〵法つゆをびゑゆれ
ハ足きめゑるゆゑゑもいふべゑに、あゑゑば、足おのいゆゆハ、
いとれぼえつゑゆとゑひゑゆふ、法〳〵ゆ〳〵ハめゑる者と

ハ法兄ぢきゑめゑうゑゑと法ゆ人にゑゑもゑひゑるほゑ〳〵、
えゑのゆなゆぼてもゆゑんぜをめゑしかやうのゑハゑれ
ばゑゑとて、ゆ〳〵ゑ人をゑれハ、ゆこ伐なりゆ去いうゑ、この
ゑ〳〵ハか〳〵めでなゑおぼ去ゑてゆもゑひゑゆゆけゑぢ
と、れとゑゑゑめ、ほゆもんそしゆゆ尺ゑて法ゆゑうゑてあゆう、
尺ゑゆりしゆゑゆちれゑゆかれをいゑゑり、ゆ〳〵にゆれゑゆしぢ
ゑゑゑ尺ゑてゆゑゑゑ法ゑ、う礼〳〵うゆゑゑ法ゑ年ごゑハ冠
面な〳〵て礼ゆゆて礼ゆゆもてゆ〳〵ゆもあゑれゑ田形へゑゑとて当
物ぢゑりなぢゆゑれるほぢゑ又いゑ〳〵法ゑ、ゑうゆゑて礼ぢゑゑ
矣ゆ、三つぢゑりなゑるを肩におうけて、をゆんの矣まゆ

りけへとて、出くるを見れば、中納言、あやしうもの
思し給ひて、あはれなる法らさどもかれとていひ居たる
るを、はじうるに、かくこそありつるよ中をとおもひ本
ふ若君くて、用心殊なれば、なかりけるよし思ひ
あへり、かくて明日わたるべしとて、中納言どのは、此方に
移り給ひに名残のけしきなむ、父の物さへきこえなむ
しまひて、諸つの猪み家の家司なる、但馬の守、下野の守
政法の弟忠実なる法もんの佐、頼しきなんどのきこえし
を召て、さかくある法は、三条なる家領するをわたら
んと思ふほどに、源ちうれじん、いつのまにかくの

給らん、其故を銘じて、つく法らゆつるをさわとも消息し
てあるやうにひてんと、待て物も言ばりつるよ、明日れ
つるとなんきく、迎りていのつるるのそで、さらに思ふるづま
此を言もせでらるは、俤のおもかげ来ぞ、ろうそう物
言ひつらんも、なとらせうは、ちてよも法すわらんと
思ふをのこども、ぱう言ま、不定めて、只今いて居ると
のうまへば、みれうや給ひていづすめ、ぞうりえ
まば、はぞらわざゆうひとなら方げう、流るごしかせずれ
かたらせなどまいりと猶ろし率つれて来ぬ、人々
ながらさていづらみ父ぞと、へば法つめてのん氏とのく

諸国職人どもしたがひあるを国の名をしめすべき
はなるをいうて侍せうそこをぶてせでわるさ
をするをふべこのなるそで志ばゝなわるうとおほ勢
らるればとて入るうちて志くそ雑色はぐなど宮ゑん
てさてもとそとかくせるこ松をひ直をはくく
あるれまぐひて為うきをりて加うくはるす侍るなるし
きまぐひをねてまうで来て侍らうト出をもえ出入せき
せ侍らまゐ為も汚なんをうわ弱ふべをとてはぐうを侍はは
んはなぐ宮めて侍くを志をはをを侍るしなどゆに中弱を
どの巻ぐちうまをひ弱るめいとれみぐをるの礼彼為こ

ハ、家をうり雲うをなけれども、我子乃家し為ならでハ雑
きてうぜんをうふ世にをうふゆ侍るハをうを礼ゐすをるな
らんとも思ハめ、いとうれる業ひくのあらん、おあひるをうのふべ
きるすをもひうをぐ文れをうぐうゆ侍んとて、出をもを弱ぞ
為をうちに、をう東も志あへ志、急ぐ時ぐひて左乃大いど
のうまうで弱ふて、所うゆ侍るまし紀弱をるべをるす
省てなん糸りをうをゆ方をうまへハれをぐたいめんし弱
て、侍るすをうとゆ中弱へハ糸ぐを、我きてぐし侍るゆ志を糸
に侍るをゆ有ぐを侍はをうをを侍わて、あすすかり渡
らんとて侍士ども物をうとばを侍るかぐに、沸門の猪

爲の方いしとや若法うで來て、爲の者をしめたべよ法
なわが伊のでは世うそこも世でハるべよ、爲も所ちん
れてうせ野ふづよとて、やうで來居て下人ども通ひしは
らぞ、妨ぐるものはんハ、新てなんは家ハきうう他
う人領べううぞとちん男ひはるいうなるるはこの法ちん、
券やとむらふらんといてう歌ようるはかうてや野ハ
れどいふうきうぬるなれバどもかくもやたやべうう
歌のてふやうてハ法つはうみは条道なるやうなれど、
はりともやう法ちん今この法つはうみういひてある
やうゆてなんうけくいはゆべよきぶあわきうあるれバ、

きうハ伊のぐやうんといとも京に、ひうう人めけ犯まて
いうんう野五バ中弼云又やゆつうなくて、ひとうてうな
ぶきうぐうこうまひめ新うやつれバ者系ぶんの方
ふいうれうぐるうふ、浮多の年ぶてひとうまつうわて、
人きうハまうやなうんとはうんと、歌ようまふとは世
のてのしい法つは猪、ゆうり所ふ呂ぶうまへ社ハ中弼云
乃いやして者のぶはるの方へうハ實ふいうれるう
ぶと中野へハ者のはうとにもべり、きうう年ぶうれ
うり法うんとて法うべうう家脈理せと勢法うんとて、人
法かきうたりうにもう系う、彼中弼云ううんと

なん思侍るとゆへつれバ、あやしけれバ、まことかとゆきを
りハをみることもつかハして案内せさせ侍りしときこえ
給へバ、ハこの此中納言ハ我よりほどのり給はずべきよき人なさい
へをかゝくれるすハ伊せし形見をまるゝすところのさまふ
なかりか、かゝるにハいつてわきまうじ給ふぞげんやうく、ゐがか
ところ様しずやくのつゆきへバ、かゝる侍る人の家ハは
べりハ、母方乃おほ父なりける宮比のへなりたるつてまいり
て侍るを、彼中納言ハ老て妻ありのみきてのびていなさけ
なく、物しき心みこ侍りしハ、悩さくり、ちる家もとら
せずとなん、婿いとたし、かゝり侍りけん領でとくりて、我

よはほどのり志るべき人あらじと侍るところ、きこがましけれ
とのこまへバ、父ハいふべきすにもあらざりし、もやし婿
兄と給へいとなげこうしと思給へりとゆえ給へバ、今兄を
侍らんとて二条わたりて、おほすけ乃流家此人くめすいみい
ぶし車ハ人くりえちを給ふ中納言一家敷よあかし
てまうず暑めて、太郎誠義ちを家よ来らすみづから万
わらんとするを、ゆすかかこのへわしまてにみぶわちぢちはしくて
なん、此事し紀給ハわるすハ伴のぐ侍らんとゆ給へバ、
浦つみのみよ思時いひしの甚志系なんいふめりし
きまうず妻しハあれ聟りあひて四へ、さしにきまうぬ

るなれば、宮めぐりなんとて、弟やうして、雀なりて領じ、
まふが、鳴なるやうにもなんといひて、孫つきば、法つの
猪ゐうり、糸うりなれば、法あ皮ぞうり、笠うりて、麓に
もとに居まうへれば、我ものらい恐ゆわてわるうり、女君に
法まへなれば、兄ものて、孫つて、悔きとおぼす、皇もんが
強云いこのるわしをとおろ法ゆと思ひて、法心道ぐと思
けんとわらふ、ちちぜんのも、爲ゆ万わて、法たゆ花多万
そりつ社ば、きのくなん作られつる、雀ハまとうやき
むらふ流ろれを、あくうけたるハ、宮めん又ところ
爲ろ志めたとかろてもうけゆきいらはしうば、かく

まで、法もくゆ作られやれ、宮つるり作るつ二条
ばこのわしうれぼぐ万でいきるくゆ作りて、かくゆ万ぶけ
させ孫へるばいと安うそなんちぐゆ申さむらふと中
せば、督ぞ孫ハけんのうあれば、家とさものハ、雀も
たる人ちぼうり、きる人なるゆしうば、猪うう
思ひて、家いくとも名ものでのつるハからう志てゆふ時
うう、かゆ法るゆけわとものいきめ、法てもくんもく
まへるとのゆくなゆめかうゆいらるていとうう字
つくしげなるるの、三つぐかりなるを、膝うす法て、宮
ごう居ゆまへ社ば、守年と思ひて申ゆういと腹

たづねくるびしろものども、男ひとづれてうれいの奏し
なんとさべあるて、弱き申侍れども、いまごやを侍らで、弱き
そのれを人乃奏て侍らやあらんとみで甚うてづひの
みはるる、さてもは家きてうぞでく人なん侍らめと申
きばげんをめきみて奏くるを、かひくるるもひらぶ、弱き
うなくのきて、松の社ちわ他う紙まぞでく人なんちくと男
ゆれば、きるやうくあらう先を、男ひやくあくう、中弱き
ハくしめやうく奏も国ら天きまらんと申弱くとて
いづくて入くるもめ社ハ城あちらめでひなくて、いくく
なんぶ紀て奏め母天侍くづとゆくふひて、侍くくら

んとて弱ふ侍ふ、こ条くこころきけれ、みまろとゆえん
ものを、とくごろ告らて、わくくらんとし弱ふらんうさ方
ふげくらんハやうく田寸らん、祝乃きぶくきまふ浪ハ、
罪いをわうろくくでうふまつあ人ぶくこころあれ、かく出
くまふるをとけちくとげくるまくハなぶぶうきをまるがんうく
るハをもんぶするうぶというるゆきわぶくこるまくわく
てのくまくハ天の下は督祝うて、松のぐ家抑取るく人やく、
なぶくく弱くん罪ハ浪くくるくつうふまつらなほくまく、
わくらぶとわぶすくも、きろくく思くてわくうんのく
いひくちてくぶはりくうんハいくきをなくうん、彼家をうん

とおぼさるるまわてのちうたてきつり孫くと申
さまくばいりめでのこれなくて又ゝやを孫いまず、我家のうみ
いのくわまて、あるうゆすいちうう今い不用うあるきり
めるを、配うて体めぞうなる大事ともして申
にるるもはうるぞわぼ百ていとうはうるまるる
を猫うすきて、家しごわて、ほうはする、耳にもきく入
孫そぼ、きてハかういして入ぬる先大法会ハ我ハ若
らぞ、法つおうみが書もてる方ててくハすなあき
のてゆふはうるかなくゝ、弟ぶか若奉をばゝぶゆるわ
孫そぼ朱うし、そうれわうう孫そんとて、ちて事のる、

はは供のくくのるなぶとうるくさわぶてるるどいへば、浮世
物も思うるいみぶと思ふるるまうるわちるぶの夫ゝ母の
死めるて彼ゝうう取きおうを、ふもうれて、ちとうぶ
わゝ思ぶゝ、かく亡きうるう、何のうれが来てるを賞
て、かくきうるぶ、いみぶう人ゝうるもうるわぶうれ、胡
あゝ実すともけ奉のう実なれば浮くのハ宝儀めんとす
ふ、ゝくゝは物を考ってぶ造りみるがいゝぶうるる、時る
ひうるるるいぶ、物あるくゝ人ぶみぶるるゝけわと、宝をあ
みぶて、怪きて居るるくゝ力、法つのからうの奉ハ、ゝうわる方
いんとて、世奉うはうゝ一見ぶるて給へばはぶなくゝて

めかう社と思ひたれ、中納言などのこゝは、物をぞうまび
かしに人やわすれぬるを、夏ごろ入ぶとゆるしなどいへば、ふの方
まをうちわすれつゝ、いとのだかわの仇敵にて、法のこゝろあ
社ば、我身もんをも矣言さんとまどふ、我身をば、そはかりなる
し、物ぐるひけるびうくさんと申せば、えゆうるれいとうれ
ようと、寿えらかこのまつるど、人てちうへわたびのこゝふ
ぶとうるのにあらねば、ふるはけうるとはあつまわて、ひつふいぬ
の時だこのとにうわ野ふ、年十物にて、儀式めでこし、れ
わてえうるもへば、ぶぐるこ宿命ハ、ぶ、ちうひうち、廉風九帳を、
ぶるうをきうるわ、えうるもふ、げこいこうみ思ふうんといと

ほしくうれど、ふのうこ姫ふ思ひうこ社ハなりけるを、ぬえハ、れ
ちぶふ思ひうんるうを、物をうう野ふうる、物の興もなくいと
ぬるうるをれも、ほす、きとこえハ、ぼうひうん物えふ、
たゝかこ返てうんとのこもふかくめでこのゝぶるを、中社
言どのうハ、こうちめやとえをうもふにかうくめでこし
てわうわ野ちめとかうちやせば、今ハちかうなうしとふつまり
てなうぶくをうも考うで、物びのゝじ法、法門、かこ考うもふ
を、思ふやうにめでたうと、男えを、れのふにをあて、我身を
まうびううぶゝ物ぐも、けうびのうて、ぼうんとてうちうん
ば、一二日ちふ物ハかへハもていくまじ、今けふあするし

て取り給ふ。いとたしうるこゝやとのつまゝ見て、こゝろ
やすく思ひまどふるかぎりなし。こゝろが百おとびのゝ老
わて、伊とゝやめかゝうとゝかて、四日のつゝめて、我子おもる
糸りてけつぶに帰さうん、人ての振は旨なぐやうの和
去めていとゝ行くくなんとこゝびゆをバいとゝかしぐりて皆
国縁ゝて返て孫ふ男系彼むてつゝ、古盃の鏡の系
いありや、見う加へてう返て孫へうゝ、ふのつゝこ寒と思ひ
ゝありきとのつまへバ、涙つゝ奥ぐもゝらびてきもんぐの
詳ゝ伝りゝて取出ゝれバ、見ぐらし人ゝて、あ旅いみぐ
やゝて笑ふいゝ者越なゝんわゝとて、ゝゝらしぼうゝう、物

出ゝてゝとゝゝへと申ゝてゝへバ、女ゝ系いで石紐やいゝとほしきゝいでよ、
ゝゝうれまゝんゝゝゝゝゝしおゝとのゝゝまゝで、行くとゝ孫へバ
かゝ見れゝまゝをれし反して出孫ふ、
ゝゝ言ふうゝまゝ見ゝし涙ぐんけかゝ新ぐゝしうゝ名
ゝ出孫へりゝ孫一ゝゝゝゝゝゝゝみて物の枝ゝ一つけて我
前やゝびてゝゝせゝゝゝてはもんゝ取きて、ちちせんのゝ
喰ていゝゝゝあやゝゝうおぼすゝんゝ思へゝぐ、はせうそゝも
せぐ涙ゝゝゝふゝゝゆしのバ、ゝゝゝゝてなんは宿ゆしうゝ
しゝゝゝゝ自己やゝん伝ゝむゝの巻もゝかゝは説
ぜゝゝ孫ゝゝゆぐゝゝゝゝ伝ゝ、ゝふあゝのゝほどゝゝ必ゝ

まうせしてまつる、なるべうやうなる方を
便なくまうす男ふたりんはひとりにそいひうちふんと
のつゆふうにて犯いとうし城郭ちかゆしと思ふわかく
必ようせしてまへ、見れ侍るとのたまへば、
うけこの方はあゆみをうにはもんつまたのもとにて
うちとうの方へといとうにをばとわぼ左なく、なかゆと思
なぐらうちうう、袖にうきこげさしをしてうれぶ
れるこすまらを方へ、若いとやんごとなくものくわぼ
うし犯なればとまでうれいを方はどうけるて、ちは
侍ものかへわまわるうつきてたぼしをうを方ば

なんとつへ、ぶとにのゆしうと思ひてたくの侍せうをとかも
のし侍らんはれのづうらたもしをを左方てんわうてに
も、輝ざかりはゆ初こ戸はそやといふことばくしけわこの
あるこうをけれと思いて、ゆ面は都をばうをを方し
けるまあれば侍うはあわ家にもゆ云侍らん患やうには
勇ようふりて侍らん時こはきる人うたづゆやうんと云
う、侍てもまぐもきむらふはとてはしをうう、お面云
也、あゆうもはつまりうこのれと思ふう、又真のうに、
男なうふと云なればまるはばうてしゆえでと云なる
ときうで、ゆの方は侍をとなりし侍侍のうし城郭ゆ

乃田ひて、ゆく〳〵とくるかくせこのことの人舞ていろく
社ぞ、そこちも懐恠ていうれるならんとあやうてえい
らくやらぞ、はつ、三郎者とやえてハとさ行ってわそすら
んはこうむわやそこゆくるそこのくいさ妻なんちまといふ
あるかてつるれバかるらだ糸り形へるいめんこゆゆべ
きるなんにもわてとゆえてゆくといへぞいちやすきるす
とてはてみる物申かうて、急ぶていめ、そてく彼者は
はちゆわもうしいとあやしく高らばの表、此書ってみて
るやあらんはとだといてくぶたいてとよげしゆあり
表へそゆうにかてとみ人のあつまりてれハ思うり、

よる人のうちらんちわふはうとあてふとうあしよハふの方は
おぎしさはも國うみとさて表らあしらわ中納言どの
うあて、わとぐう、かうく、なんのてもひてとてはてある物
をふのうにをれバはゆう思えなとて、引ひて、ろと、
おのの表し高らばの表うにさせしにうあれとえ
うう、いかうるすならんと思ふう、肝ぐてさわぐに、
きて表うて出るあをうう、表うう、高くかの表
はるなれバ用もはをはてのりめ、年ぐていみぐて砲
をのみえをつる表とやつのはるとうわと思ふふれうう
いみぐてるふうなとて在のつのるり、ゆとよく内

勘掾ゆうとてのち家、れとくに、家うち社でいみづく仇ごと
きと思ひ〳〵ちくちも、此きつるしけわと思ふう、罷もな
く、あくく社脇も思ひきえて、おの中に妻ひのうけるも
のと行よ漆くのう男日けん彼いへ、ハけ人の母社家うて、
うくおりしけわとひいまず、うう〳〵社ばゆみうこ、婿くいこで
うてひうまし き家よもあらでいかの所をうち出うぎあ、此
年ごろつうりつる家の木を、物られてうれ墨びとり彩へ、
家のひくまゆ僕うくうわうし彩ものあとりく、家、我芸
こハ仏でゆのうさもらいんよる人はやうにもの〳〵彩ふう
れ、れのでうらは掾くきかぐ〳〵人なくて、えつくる人

ごとう、西日の詞ハ体のよくとあはくうはくあこ、
れれ、義掾といへばいはそのうおぼえ社くぐひなく人
うういふう、浮てわんごてうう集めるうるたのもしく
字行〳〵れといへぎうう郎のうまいでやう社ハ美うけ
乗のてうじらあ、ちまハいとんみじうりうき、雑前当
いのうりくてうじたまひとう向へぎいのばかりうて
きてるうて、かうてしうりはぶ〳〵とかうりていうくあ
ちぎなどいひをうん、えてえまうんうつまてうう孤の
しけ社といへぎ、ちちぎんのうみ、つまハぶくをして、あ
当いえでいれのれハ出よのみ付りて初ぶりけを、ひぶ乃し き

ゐざをこうきてゆひたれば、はつはうは八男ひとり、
ゐ目てかく所をえらぶるやうにはをゐ所ふさけを、あらと
いうく男ゐふらんすべて変らひもきもやうはし
ら、ゐまくへばゆの方、ひうゐ紙の去がまし、そハ原うへいづく
るにもひうゐ、なりいひそ、悔くわ田ゐしましけきし
ゐかくと云にかひなしいかゐ強き佶後なども云もかくまし
にくうのこけれと云紙ふたちやて、我らるどてこまで
ゐらこゐきひくる学をえつくんとて、羨くう伴みど
うて、今ゐに来らん法心ハこと夢くかくしかゐそせ
ゐゆこひてんとこのく者ども云、ちこの羅ゐきん色、

あだ来くと思ふ中くも、この奚ハ、家文原くる人ゐくぐ
ひなれば、ちかうてやんかくんをわくしゐ男ふゐ奚
ハ、我を謀りて、うう奚身になくる人なればちと人
よりも見むくつきていくみゐくゐうかるべくをおもふ彼
いつかなくうしゐハ三つくてもいろハゐくもわゐでい
ゐきこうし家ちくる姫奚なりけわ、家身心うしいたくが
なんと思ひくれど、ゐ乳ゐ児乃いと悔くうおほゐ去くれば
絆くて、ゐ男日ちれゐまできしけわ、ゐ稱ハいと悔くよ
老くうれもひくみて、ゐくゐなくのみもてなくくれば来
こづくひてなんきける、中強云づくくるハ男ひやこて、

我身のたよりなく思ひ人にも侮られつるをなげくに、
両親しまするあはいで宇ましくて、手出さんと、出かねた
まふりハ、それハ日暮め、明日とのこゝまふり、小の方が
子どもよりそなたさ万いうにめづらかう见えてむと、独りご
し、三四の恋うれしバ、清水まで、蹤めやといちをうりし
にうつりけれ、かくつひにハやや忍ふべうりたるもの
をおゆくみな脳を见を忍ひうれかいつら人く出うし
ハ、はかバ恋のうきを忍ふ心けわらしご隠びんなげまて
居てゆうりしをねらし思ひ入みまへるしけり、
心みのうこそかいと脳いてうハ、かくはまぐねうよ常を

せられぬるをいかで来てしが菊とりへ、ぎぷむ寸めども
はぎれそハ、な思ひそ、なむとども多のり、直きはれんつ
うひつまへ、典業の脳をいみじくおせうりしハ、思ひおき
たるにうつりけれ、男女知りてぞ来てまひ候んといひて
うひ明しつゝ、はとめて誰つの猪夜ようとてれ文あわ、
きのふ越前ましてゆえし、は消息ハ、申はきえんや、
はいとまはらバ、そふ必ずまうせ忍へやしさすべき首
とやかうつまへり、はくのへりハ、
きみふハ糸物しはりしのバ、即時来らんとせしをは
著てなんなり、今まかうん
とききえ

はべりし残害者もなかりければ、此事の後にまでまかりし中納
言参りたまへりとやゆゐれど、かかる夜、兄へとやらはべ
きば入りたまへり。南の母屋ひ廂まで営両したまへり、女
房たち帳の内よ居給へり。此まへの人、かくおもてへと
のたまへば、皆はづれぬ。指むものひてたいめんしはひて、この家
の畏まりもやゆべく侍るをとて、此又人まま我なげくのる
る人もなくるめ侍るを、かくるついでかやうのさまをよとなん。此
卿ども、くらをはらけんとびへるを、道理なれども、寿の状を
兄侍れば、こくにかうは、此まへよりも知りまさるべく侍れ
と思はべるに、さてみまをうちぬほどなり、此まうそなたもなく

てわたらせたまふは、人数にも知ばされぬあめわと兄はべし
り、なにがしもわれもはし験すべくやと心づきてなん。かく
にきこのりわたり侍るらしごろつく後ひ、はんいかたりけ
るより。かくきはさけたるみうちてわたしたるいと悔しき
ほどは、年ごろてよかしとなげくよ侍めるかし。同じくは
たしうに経ぎさせはべ、寿来らんとてなん、はせたるそこ
やなた侍りつるとのたまへ。大中納言いとかしこまりて仰
なれ年ごろてあやしく亡せ侍りにし後は、世の人々
もやえず侍らざりつれば、世のなかなくなぐさめわ、忠移るが
う侍らは、こかり、いめぐ置あひなんとも思ひはべらむ。

老たるをへてたふとき寸ともたらめをもかけて、新象
もなくやちをめハ狂学ゝ強ゝるなめりと、些ゝうな
げゝ仕りつるに、此家ハ加茂仕ゝ志ゝ、ゝて紙じきべ
らめ、ときゝのぐせん、ちゝにたるべゝうゝて仕れとて、
いゝうゝたゝれまて、前ゝ仕ゝゝゝひ仕りつる、かゝうの後
ゝ仕ゝふらんと系ゝたゝらざわつゝいとめでゝう思ふや
うゝとゝ名、諫ゝうゝるやゝうゝゝゝゝゝむらひゝゝれゝ万
でかゝれんともたゝれ仕ゝりけるまゝ、ゝゝ軽をびん
なゝと思ひおゝゝ添ゝやゝ、又面ずをゝし、見ゝるゝ紀
きゝとゝれもひて仕ゝるやあらん、二つのうゝゝのひ脇

うゝゝ、雰行かゝゝまゝハゝん、尚も系ゝを万はゝゝれん、い系
まで死仕ゝゝめゝるゝをあやゝと思ひきゝりつるハ、人の新
をゝんとゝゝしけゝゝなん情ふを仕ゝゝて、ゝゝ
社ゝまゝへハかんの名ゝ寸ゝゝにのをれゝて、ゝゝハ寸な
ゝちゝゝゝハ、ゝゝなゝの暁のゝるゝもゝゝ仕ゝやと新ゝ仕ゝり
ゝこのゝゝみゝ彩ゝゝ思ゝゝふ心ゝゝりて、ゝゝばゝとせいし仕ゝを
ゝゝゝゝゝ、ゝゝ、ゝゝ仕ゝりゝゝゝ、ゝゝゝ思ひて
ゝゝゝりゝゝひゝ仕ゝりゝゝに、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝれゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

切なみしを、兄や侍りしか、衣、さうしをやゝ右まつる
ともゝ、ふゝおぼさじ、かし人をみくるゝ朱てつゝふ
まつりめぐらんほどゝ、きら社をれとゆえ侍りし、
新参ゝ、ゝ就めて、典薬のゆうゆるさせつゝへわけ
るこゝいとゝゝろゝゝくおもふ所へしうバ、さうなる法
まろ、侍兄ざらるとも、侍ともおぼさじと思ふ所へて、
うち形がつらしゝふゝ思ひおまつるるおらるれハ
べらゝバ、あををバびんなゝとも思ひゆ右ざりしうども、
北の方は情なゝく思ふん侍りしのバ、あなどゝ侍りしゝ、
のは車とゝ云侍りしを、学ゝ礼まる法万ゝをのことども、旦ハ

いうゝと兄知ゝと来ゝていとゝゝもけうんせさきだゝやと
おぼゆえ侍りしも、びんなゝく思ふ所へれど、ゆゝるるうと
侍るよどものやうに兄ゝまふるゝ所へ、ゝ、ゝ、ゝしを、まづ形
兄を兄をまらめるゝをゆめれバ人の祝るゝ中ハあされ
なりゝわゝこゝ兄所ゝ社バいとの侍ゝうふまゝうんとなん思
ゝ、ゝ、ゝ成ゝるゝと移ゝくゝ人ゝも老改まゝるめるを、兄
せゝてまゝゝでゝなゝるど思ふたゝへバなんゝかゝはし
ゝゝ、侍ゝぶゝくゝゝゝ兄ゝへバ中弼ゝいとはゝてゝうう
て、侍車ゝどもをゆ所へ日て、おぼゝ、おまゝりけゝるゝゝ、
かゝぶわなゝくいゝゝ思ゝて、ゝゝゝまゝ、ゝゝ

ぢいさと子おなじ男しわらはにるも仕うぶわしうど、母
屋しうに除老ハまづ屋にとりつまとうて、松らんて、
夢ういとはしるもの仕りうん、さ社ばいとうれ
りうし述ゆ先さ子べるも仕うもで、てん菜ハをゆ
しうるすさる老くハうの涙者こゆうし仕らん、新
屋うしうめ仕りしるもの、男ふやうなうあるうとし
うわとや仕りうばわうく杉をうくてなん仕るまわ
も菜えうちをまづ尺をらんいづう、そたづうとの新くば、
をとこ矣、ぞうくうるれ帆杉しやりて、ちうう仕らうあ
わ、ちて菜面ちうくとや新くば、矣砲うあどわぶわ生

新つり、父杉とぶ尺うまくぞ、いみぶく仕ぶく、物くしく
わぶまはわて、ちうくきうもげうる殘のひとくぶうさも、
ふうう簪のおわ物のうちに花笑て居うまくら、尺うに
笑ちわハうと思ひかづきしむすめぶもよ、ぶうらう
社ぞ、かうわくるものを、おうゑて杉うらうしを、ぶう
いうう思ひけんと、ぞづううて、ちうう物うおもれ杉ま
て、今まで、ちうれうまもぶうらる、たいあしあるる、ち
ひまなくかん心のびていう社しうとのうまくばゑ、
ゑうう仕思ひや、ちあめを、うれ矣ゑさいなみしを わ、
杉ちてあひていやうまねて、杉びんなうるものうう思れ

ぼしなるまゝに、あるかの所のそばに
佇めるを、つくみてなんゐなかの人はたゞ
め給ふも、はなはだせられつるといふ、かぶられ
く思ひきこえつるものゝ、はなはだいみじく
佇るをうれしがりてあてがくゝゑ所ふさんと思ひ
し給ふ、ゆきゝそで、夫をたゞうゝ男やゝゝし
て、御前ゝゝまふくけてとうけゝまはわ合せれ
ば、中ゝうゝいとゝう社ゝくなんとて、おゝゝひゝてゝくへば女
夫いとゝあいとゝおぼゝて、ゝてゝもゝて畏たれと
申所ふほどゝ、うんの夫、以ゝゝうつゝゝゝなる男夫

を抱きて、急ハはなはだ、四なんいとゝうつゝゝ佇る、夫
がゝゝふのゝもゝ所ゝゝなん男ふゝゝくる
よのたまくばゝ夫ゝ夫ゝうゝゝゝ行脚ゝゝさ
まふ中納ゝハゝゝに、老ぶちゝ、侍とかゝゝうゝ
たゝうゝゝぶおぼゝゝ男ゝゝゝけて、ゝゝくゝゝ
まゝくゝゝる篇ゝ社ゝで、ゝゝゝかゝわて抱ゝる社ゝば
にや、夫の下ゝ鬼ゝゝの人もゝゝくみまゝゝとて、
いとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ、ゝゝつゝなんゝわ
佇るとなんゝゝ夫申所へばゝゝや知ゝゝゝゝ
夫ハあゝなんめゝれゝ、まゝをゝ弟子佇れど、

ふきつゝもる雨ども、海くさき塩ぎくせんなどやた
まゝて、はだ雪ふり、はるもの人くゝもこゝろのゆるけ
にハあらで、年うひまでゝいときたげく警ふゝ
をゝとも云、はつ、女房ゝ我ゝ我ゝ我ゝ
よとのゝはゝへバ、はつ、基盤ゝ
つけてもいとまづうゝゝれども、赤しゝる事のハやゝ
思ひてつめ、三月ばかりゝゝ、夏清ゝ
ゝよへゝゝやうに、れとゝゝゝゝ二十人
ばうゝ居なみゝり、おゝゝゝ
ゝゝゝが来ゝゝゝゝゝ居ゝゝけわ、ゝゝ

名なる人にて、いと異あわゝれしと思ひて、目を覚ましてゝ
わゝ、知もいゝゝれぞ、ゝゝる人ゝゝゝ人きけ、ゝを
うゝゝゝ有けゝとゝゝ、はつ、女乃破し、ゝれゝ
あをゝて出ゝゝ使なし、わゝゝゝ
ゝて、うゝ涙ゝ、ゝゝ破ゝぬ、はつたゝけゝ
人ゝなゝて、おゝ
はゝゝる人乃、ゝゝ
ゝびていゝはゝゝゝゝ、中ゝもかゝの矢も
はゝゝゝゝゝゝ、ゝゝ乃ゝゝ
ん去ゝ、ハ分ゝはゝゝゝゝゝゝゝ

ふるき松殿さんるすハ松のまへにげんされしかるべしと申
給へ共中納言いひとられしとおもひさるすがゞわらし
其後れバ一つくり給ふまじに、松くじうハ衣冠一よろひに
かゝる方ニハ衣裳はら東くかゝる方ニハ緋の装束ぞく
一領入て、世に名ある佩刀なん加ひたりける、我等ら
ニハ女のしやうぞく一具み錦の裳襲うひて被く給ふ
中納言、酔てまいりふとて、世ろこまで侍りつるじの心
うかりつるりかわしき契りよなどのたまふ、諸侍の人
松殿へあるしハ、五位ハ一つき、六位ハちかま一足、雑
色ハ腰佩せさ持るまじとらしのこぬ所申とみつ

るを、いつのならんとあやしくおもふ程りたまふて、此のころに、
諸つの種族まへるのでとかくしてよからてんやくの助なり
ハまことや、謁せんと志給ひしまづうしげなのうまへるに、
西京むろくちしてなんみえつるちとどめうつして家なる
るかぎりなし、人々の肴さまいみじきあまひみつけるのれ
とみえて所ふる、いとおほくしはへハ松その一つのなかるなり、此侍あ
なかく、其の上に附物とや八足ひくまへりし、部屋ごとめ
まとハ自己のらおもはれひくつかしが、承ハきこじ、ともか
くもせよと放ちつかひしかバ、さう、典やくも何そかゝくり
よかりきめく人の物めかしく給ふなり、亦せしるすき人

のせんやうのてまふハなんで、あやまり花やのるるハ
もうるとぞらふ找者ゆいみでう醉て侍りてなくぐら、
いみでう妻でうりつることをかりてふきりて三十人ハ
あ者うちの中にもりて、おのくうるるる社三の
妻のはうるれ、四ハ妻の伊乃きみ、彼おもとゆるやき
へなん係らひつる、花を識てちうぐさていとうるる
ん男ふとうをこ四ハ妻ハ一ととろろふて、やて世の中
ハあさられなるものうるけ、ハ妻ハ嵐うぐう
信て、彩やうるもりすらし時を、ぼるおるまはりて人
つうひとられんとや男ひ、ちて母ハ男さんるるぐ

かくくも者うれなるぐやたるや朱れまし、さんのえうけ
ぐ四のきみもお信てうがるぐのるる、かく富世もえう
彩でう人ハ巖格よ杉ぐ四しかぐでをいうう人四
ひうるせんゆるるハ四ハうるる生きうをりぐたる戒
侍りなんと四ゆてえへりをいつるか方の生り侍りの
ばえるるるぐ四をきにし後ゆ、ばる人ハんなりるる
とうれ物のるるるるるぐ天ルるおけなりてそまで
侍りつるるるいい二人うるるひお信て四ハ妻、
人のうつとせるハえをきみれぐそ系身ハうる世ひわ、

其ころのみ閑せるゆゑ世中ハ兎角世川のうちこうすれ、
いとゞ好くつゝ、中つゝめて、おくわ物ゑ好くふて、名ようはじめ
て、義世身にて、なるゝ世わびハいと名ゝかよおびを、
行ゝたゞ日ハらん、返しきらんとの好ふかどうぼつ世
かうせ有ゝうゝ世文ゝらへ、ぎいうぎ面いゝ人多うゝ、
きのふハ言ゆく、惜くも世わしうれ、名ゝご世好しか
ハ手ごろ世世物ごゝりも、中ゝきぞ成うゝ、今わざ
に叶ゝ言ゝうせゝきハ、ぎハ、ゝ後うくなんゝれ、
のわ世きゝせ好ひうゝ、程きやわゝら好ふ世ゝうず
ぎ好びんなゝ世ゝ方ゝすわぶしゝらんと、かぶわなく

わもひゝうきくなゝぶくゝぶくなん
とあり、中のきみのもとに世文のゝ
ゝ好ぶいとおぼつのなく思ゝきく世ゝかくなん
ときゝゝ有まゆしなゝうゝつ後まるおゆく
てわゝれやしたゝふらん、
京社ゝとゝ船のふ乃思てじいきねど京う
京ゝ世ゝ後ゝで
このゝにも今ハたいめんと思ゝきふれバう
社ゝくなんとゝきゝえゝうきく
とあわゝゝらか産世人並居ゝほゝう、ゝわかゝて

つゝゑゝきひてあるを夫を、我もとにも物しゑへうゝと、そ
ハかゝらはまゆゝまゝういみじきや、ゑゝゐるゝ居ゝらし
ほゝぐゝていうゝと四ふ人もなゝうわしものを、おゝぐゝの法をし、
やゝの侍きゝふきけもむらハんと思ひしうゝど、方ゝふゝと
ゐわて侍りしかバなん、とゝわハゝとゝうれゝゝ、ゝゝゐる
もけもむらひめべゝと思ふ弟へしもいのち迎てなん、
けてゐゐまハらし事ハ、なゝ月ハるまゝゝゆゆハゆゝんハ
べわゝをなゐかうせゝ勢ゝまふ侍ゝのんゝうのゐか
きれゐりと、うゝ志詠り思ひゝまふ法、法おびもうの
る弟の月ひゝを、雪ゝ侍るべゝれハ返ゝ条

らきんと思ふ弟ふれゝど、ゝんゝざしのひをとるゝてゝなん
けもむらひてる
とあゐ、思ふ弟の侍返し、
年ゝゝ、ハ枝ゝしる志もなゝゆうにて、ゐゐゐゐゆゝ志
きゝゝべゝゐかゝゝなゝゝきゐんおゐゐ弟ゐるにいゝもゝうれ
きゝゝてなん人もうゝゝ(イなる)ゝゝきゝろうゝくもおしゝからを
たゝまひゝゝとの事、
ゝ侍ゝて、ふれし人をうゝとゝゝぶゝて志ゝでゝゝまゝどひし京ハ弟ゝさゐれり
とゐゝゝ弟ゝり、かゝゝて後ハゆゝきゝゝびゝうゐゐまゝゝゝわ弟ゝゝす
かゝまゝわなし、おゝゝぐハたゝゝゝくなゝゝゐゐで弟ゐおいゐす城弟

やうさまなど、たゞ今の時の流なれバ、恥をすてゝ参り
侍りつる、女房ハうれしきものなりとおぼしていか
でと思ひ給ふ中に、さまをバ此子の如思ふらめど、この
ハ、みなうききんぶちにも紫雨きん、うなさにもさうら給へ、
母君にハちひさくておくれまゐらし後、父にもおくれまゐらしまして
、親となん思ひ侍ゆるに、よそでつかふまつらんと思ふに、
此度ごろおぼしやうとみゆらん、天道へもおなじくよ
やうえ給へとのさまふを、後前ちなんのさゝすふ宗を
おぼしさるゝすぐ限りなりとかゝれバ、ふみさうらいと述つ
きしのバ、此もおもふらん、我にもいみじくおぼゆらりでそう

ぜひなき思ひおかれ給ふ、此子ともさうびんなく思ハざらまし、
男君もおぼしおぼゆるにこそ、有られまことゝかの物
めでし様ひとへにわたくしなれバ、此君なりたまはと思ひよそ
る事も有て、やうく父がよそにていひつくかく深くおぼす
いの猪、女房ともかくさらひ給ふあまりれ、中納言さうらいさく
老まされ、世人ハ意ふる親の為にする孝子さういと孝と
思ふ事ハ、甘千やうかちなる宗、賀といひてあそび楽を
して君を給ふ、又菜敷るとて、年の中じめにする
事、はてハ八議といひて、経ほとけ出、供養するもこそ
ハあるれ、此まゞ日づらくさやうにきんとて、ハいのある

るをこのせん生なごらは千九日をる人ハあれどゐのす
ゐうてハ位なゐるべし是らが中にのゐゐゐへ、せんとおば
けんゐるせゐ者をうんとゆ所へバ、めゑいゐゐうれし
とおぼして、楽ハ、ゐゐ、而白くをかゐゐるゐゐうは
社ゐ、後の世までは、月に益なし、卅九日ハ、ゐゐ、ゐてし
かゐゐ、ハかうなんは世もいとゐふゐ、後のゐゐも
幾ゐゐゐゐべゐれバゐてゆををゐうゐほゐゐとゐ所へバ、
男ゑいゐゐゐおぼしゐめ、ゐゐゐもされん思ひてゐゐさら
ば、年の内ゐ、ゐゐゐへゐ、仔をたのもしげなくをんゐゐ
所ゐゐて、あく法日より勤ゐ所ゐ、八月のほゐゐせんを

て、強かとけ出せ、佛法喚せて、ほとゆきゐうなるべゐと、
をとゐ、ゑ女ぎみゐゐいき所へり、ゐく、縫糸、ゐゐ重ゐゐ
なゐゐ所ゐ、ゐんゐゐゐゐゐゐゐと思ゐるゐなしゐ、ゐ、ゐ、
ゐ、遠方ゐ、帝ゐゐゐ、ゐゐ、ゐゐ、ゐゐ、ゐて、春宮
位ゐ、郎をゐゐゐひぬ、ゐ男ゑ、ゐゐ妹の女帝ゐゐ腹の、一ゐ宣
になんおいしゐゐ、其ゐ、弟の二ゐゐや、坊ゐ居ゐを所ゐぬ、帝
母ゐ女御、后ゐ立所ゐぬ、浦ゐ、みゐうみ、大弼ゐ云ゐ成ゐゐひぬ、
中納ゐ言ハ、ゐ、ゐ、ゐ乃ゐをゐゐ、宰相ゐハ大弼云のゐ、弟
ゐ中納言ゐ成ゐゐ、ゐ、ゐて、ゐゐゆかゐゐゐゐゐび、ゐゐ、
ゐいゐめでゐゐけゐ代ゐのみ成ハてぬ、大弼云のゐおぼん

つみじうる時うう、男は中納言いとわもぶ〜〜〜〜う
き〜と田へり、七月の中ゝは、朝家はてゝいとほそぶし
くいと来なるゝうちも、代は八うう乃年〜ゆみ孫ハず、
八月廿一日にとなん宮めぞ〜る、我は殿うて者〜乃は
んと思せぶ〜、ま〜母きんぶ〜ち、たゝやは〜わ〜ら〜ぶ〜おが
して、中納言殿よりう孫ふべ〜をなん宮め孫ひて、中納
言殿といみじう降理せ〜せ、孫子者〜せ、あ〜ら〜は〜
簾ゐ〜など南〜ゐ〜をは〜せ孫ふ中の者は〜をとこの九
が羅、袋ゐるなども、皆は〜殿乃家自簾〜れば、卯彼ふ
を行ふに〜て行ハを孫ふ寝殿をゝらひ者〜ひ

て、大納言どもく〜は局ハ小扇うけ〜わ、きん道ふの方は
こつぼ〜ハ〜ハ〜ら〜ぶの孫は帯を者〜わ、明日年はぶめ
んとて夕さわ者〜し者り孫ふ、せ〜ぶ〜らんをとて、人〜者
ぶめ孫ひて、車ふせつ〜て、ぶり孫ふぬは〜殿そふの方者
なぶちにも〜ぶめんゝ〜ふる、深〜、綾乃うちき、をみれべし
ゐ〜のかゝ〜ふ者孫へかゝ〜ふ〜わ〜ぶめて羅〜ゐればかゝ乃
強物乃綾〜ゐ〜ゐ方ひし衣は者を、思ひ者る人ある
べし、あ〜ぶ〜はふ乃〜ふ三は乃者ゐ乃中に、昔物ぶ〜ふし孫、
むかし〜孫〜ぶとひひし時も、わとゝへぶを〜しけ〜と兄
し〜を、今ハ物こ〜〜ふ乃〜ふ〜ゐ〜ふ〜人、夜びて、ゐハひ孫〜

猪きてゆえてきんを、第てまへる物、ちよう形くわたわてえ
ゑめ、ふのてのこんてのぐハせんと思ひ成て、物ごろりてまぐ
をけなくて、たのがもとにこるりてまひにてこのバ我子やと
なん思ひゆえてを、たのごゝ性(けんぜう)よりもち後ゑ付りて思ひ
者(や)りなく物りみるすもけるを、けやうにてやも物し
わさうかすけらんぜうれたんと、かぐわなくいとゆしく
なんといへば、夫ハ心者(しゃ)ハかをかくく思ふるあれど、伊
ゑ、けらうす物しまるやハけりけん、思ひおくるすけらまで、
たぐ伊ゑ伊ゑ伊ゑおもふはよ心ぐしをええまわにしぐ那
と、思ひゆくるのとてけるをしるなんとゆてへバ、ふの方、

特(とく)くもけるう角ゑかからぬ者ぐゑ多くけるなれど思ふ
けち方ゑをけらめすり、うてわたにるをちん、孫もく
ゑてこび申きべるあ法と中那ふ明ぬきバつとめてゑ
りすの迅(とく)くはぐめ那ふ逢(えんぐちめ)紀いと交うわ、況(きう)て思信ね
数しらずわはうわ、うぐろきひまぐひ那へる中納ゑ
ハ、伊ゑのでかく時の人ゑを聟ゑてもけりけん、幸ひ人ゑ
ゑろゑけれゑ云あぐむ、聟の大弼云ハまてはゑちあ
はりまていと法ぐゑて、物くく出入るわとなひあり
き那へぐ中弼云いとわもぐくうあしてて、老ぐ
ちすり、須をおわゑてゑらびわるわ、法末のきいね、

中ほど、三の矢乃をとこの中袖こいときよげよりちうぞき
て、糸り弱へわ、さんの矢、中袖云をとるに、弱てちし昔
思ひをられていと少てうて、目をつけてこれば、さう未
ちう始めていをと法こ家にて居てるを、尺ちこいとん
うくつらし、我身の業ひあらはしうばかくおつでまて
ありき弱そてもこなよほどならでいうくらかから
法しと思つた、糸身のうちうて、人きれぞうち法て、
思ひいづやさこれば人をつれなくてん弱よは我身しけわ
と、人きれずいちるるぬまりぬ法、業律法などいとや
んどと弱よ人多くて、歳歌ちこふちく弱どもとて、絵

一部を一日こ完て九部なん書けばめちりてる、毫毫書
絵法こぶ弱などかひて、一日に仏一そこうをく
やうせんと始めてゆもひ、一日に仏一そこうをく
なんかせ弱そ法きてこはげなるる弱りなし、中弱よは
そくのそ弱、ふそ、そこみとうの白かのまぎて出せ弱ふ
て、軸こはいと寒うかこうばこ流をこておくよにの弱第
こ、一部で入こ、今百部弱は、紙のなこふぞのの泥こて
出て、軸こはみ晶こて、蔚絵の第、ちよ絵よは弱の文れ
きるべこ法くのんばくをして、一中で収こ、たこの弱
ほこそそる、杉のそげの物は入こじと尺ちこ、朝夕夕

産の禊はうまぶ名のあるせはきめどもかつ孔子ふ
いべてんもとなるるれくきつくさんと思ひうるへ
ぞ日は孤るるまにふとさやはちまバ来ざるまにハ
人くもかんをあも糸りうも、そのまは接和のねまと
まるくは人らはじめせうるこをやたるまへりくれバ
ほいとせたるぐしたうもつはるも完孔日々れバかる法
や孫嵩やうは物ハ多くえてはつまりうるに取てまら
んとする百ろ、先の大いどの法文孤云あるあ、足孔へバ
けふぐりうもうにに物せんと思ひつれども、脇の毫お
ちわて、ちうぐくすはるりろうしくれバなん見

ハちるしばこのわいちくぎあるせるまくとてなん
とあり、青き海理の蕪ろう、黄色は橘りれて、あをき
体く紬て云葉は枝く付しりの方、女天の法許くはは文有、
いうぶ野かるのことハ巣りしかど、みくまふるもも
なかわしのハそ後ぐろなるちまも、人ろるまハぶや
ありけんち社ハ女まかくはめやうれる和をひくもけ
るとちわをむにぶうるきうろてきべるハ　とあり、
房は羅の、杉葉むく濃なる一かうひろ、いとはうる
る紙の糸を、女郎花ろつけてりもぐは孤と思し
るるまべしはのへわやるえ孔ふにぐく、中孤云葉もり

とて中のきみは清女まことに見るまへば
いとゞふかくすゞしきけるをかくなんとも
のたまはせければ心ざしぶかくぞ入きをつゐ
はじとにやおもく侍らくなん　とてゐづくし
て年けるもちにの花を一えだつかはして後らし青
くいろかはなしていとこのわをさきやくのうへ露おきし
ふかみ中宮よりとて官清典侍清女もて参りければ
歌めいて清つのひ院きうならぬ方よ侍て読み
うみたる文ながらひし此歌の清給ひりて九條の侍ま
なかるあるどきかづきはし答し清ふ清女まへは、

ふふきはれうしきやうにきけばなんにてすもとどめ
つられは結縁のためあり　とありこの御みむすく
菩提樹の御縁結なん入させ給ひけるむかしから
も人も見るに、男がみやんごとなき人ありかくもちひ
て歌もしとよろふるは、さうれまさひとえ中宮
の清くのり先やたま清ふ、
いとくのこはりてうけるは見めんたふみえるはただ
此ね日をきなんみづうらきしげて、かくまりてやん
ちを侍る、よるつは此るすはてゝみづうら参り侍
みてみくかくまりさぞ歌すべし　とゆえる

ゆふれてうしとゝ八綾のうしとゝ
からきぬ、うすもゝかさねの裳かづけ引ちらす
まりてかんだちめきん達ちきて巡りたゝふ
さうねの笛の音ゝゝなんゝ人ゝゝ多ゝきりける、
中納言ゝなんきたうを筆はかうにつゝわて、やい柚
う彩りなゝて、うすものゝ透て引ゝりける、紫染なるを
やうゝ柏八数ときらず取つゝてなんおさゝりける、綾木ゝ
八箱物をわりてかしをゝろめて、結ゝてゆひさゝりける、日
ぐゝ此中ゝけふなんいとはるうに物入ゝゝんゝみえけ
る、やんごとれきかんだちめ、きゝてめぐり引ふとゝえる

人ゝいみぢう、花の蕚ひ面目をけるゝ人ゝのゝると笑む、狂
人ゝきゝゝかゝんむすめをゝろう、神ほとゝきに申てもゝゝゝめ
めといひひつゝり、かゝゝて九月いとゝいのゝしうきゝ引ふ三乃
宮中弘法をけふゝゝと思ひ引ふちもあらでやゝあいみ
ぎう心うしと思ひつる魂やいまゝそぐ此のけんゝるは
て、ゝゝてゝまふにきばし法とゝまわて、九法つ乃すけのあ法
を鳴ゝつまひてなど請ゝくハゝるゝとのゝゝまへバすけなど
てかむつまじかゝんといゝゝつゝ社バ昔八ゝゝまゝるゝかいの
まゝ思ハずやとのゝつゝ法へバたれと申ゆゝまバゝゝれきかゝ
社ハゆゝゝむ、三の宮とゆゝゝゝゝまへバきゝゝ伝

べりやそらんといふれば、かくやうえる、
いまへまづのはぬ夫ぶ高うれば高くきるものはらざ
わけをとそで、世の中はといひてもてまへば、すまあかへう高を
ぶにゆんと思をかしなどわ形くもきたん形とうるいう
てかうくのまひてゐ形ひめとかうれば、さんの夫、きばし
立とまわて形へのし中、行しよ吉づき形ひつらんいとん
うくゆ思ひてかへりうと言べきにしあらまばけて四め、大
弱云爲、はうくみのるまなどいと侍うめくうきてかへり形
ぬ、ければ今一二日ぶるおそくゆをと申形へどせばくて、
きうれまき者どもいとくむつのうて侍れば今うれらと

どめてまねでうんとて、きひて大弱云どもわてきかるて
へば、おとぐいとくふかくのそれて侍りつるのきさん侍
ものまて、中宮、九大弱爲より、ぶめきわて、うしら犯こんば
べを乃をまわつるに、命匠て、光の面目とはおろうなり、弱の
のおくは弱ほとけ一生を侍きし形はなんいみぶるこ
とに侍るぶくかくまうなるるをせき勢つまへるる
ぶ侍くよろこべ者、大納言も、女君は、文にもいきぶかて
有てうれしとおぼす、昔義のいとかしらを物と思ひさ
まへて、侍くよつへおくのんと年ごろ義しおきて中納
言爲いまし時、もとめ形ひしのど、承りでぞ成

にしハわとの家よりは料うて、物〳〵おきてゆきひろるに古
うみをけれ、家家をまらんとていとをかしげなる絵
の袋うつくしきまり新へハ、家家をまり新へ、おちうみて所
なきまつ笹いとうつくしとれば寸、ねもかくしけて
殿へ参ふけてらり新へ、大納言、中納言はいみじくう
社〳〵と思ひまへりしこの れ、なるをみしてそをまらん
このまふ、うつ海かどに、たのおとぶとまふ、花もてゆ
くまに、清涼殿つを塔ぶ、わうう花やのなる弱をとと
乃職まてなんうへるとて、鶴ひつる大納、大納
言うゆづりまふ、ちかなへりける世なりれば

許のハさ方うげんいと花ゆぶはをわ新ふるかぎりなし、
中納言いとうふ〳〵うふ〳〵とうびあふいとたるにハあら
わど、新ふなゆうまふを、大納言はのこと歌新日て、
時時うのまひしをうおしつうふまらんと思ふ、いと方
きばしづるわをせなんと会で新ふ、ちとしなんとうぢに成
新日けうと中新ふて大納言の思ひける、ゆくさきくく、
又も考てんとおぶゆる人〳〵ならばそ、家にるぶ思
ハあ人も考きりまるゆうに思ふとも、七十は笑せん、家せ
んと思ひ、わかうげんてうそべうかぎりハあ〳〵て
びてき、う社しとおぶゆるまハたぶ一るびてやと

なぶいとのひなし、あてて後ゝハ弟のるすれども、彼この
ゝはゆしうよしゝ思ハんとする、そ度ぞうりのる、如此
増んゝぞりハせんゝおもゆしゝて節ぐ彼ふ、あゝのるれも
たぐゝけゝきのゆまにてうふまつり、いゝでゝゝと思ひゝれぞ、
ひとつぢゝ物のゝまつどいとやはう、人ゝのけまつ此鄉此
るゝをなん元ゝてゝへゝるゝ法つ此射ハかうもりをはて、三河
のゆゝう朱ゝゝれハ法もんハたゞちるゞほどいとはゆて、
將てゝぞりゝるに、ゆゝ、梅此思、ゝゝうゝの重盃一ぐ、
はうゝぞゝゝりハじめていと細ゝなんゝてゝぞゝ彼ゐ
ゝる、彼ゝのもゝゝもかうゝゝいゝゝぞをゝんする、彼ゞ

と、ゝうすはゝゝらせにてうハしゝゝれハすなゝゝち、ちハ男ゝの
はゝ許ゝ百匹まり、めハかゝうゝのはもゝう、蒔ゝ後ゝる彼せ
迎まゝり、舞すべゝゝるゞものゝすなどめしはゐせなぐし
彼ゝふ、はてゝう度ゝてゝし彼ゝの、ふゞまなん多ゝゝけるゝ、おと
ど、なぐかゝゝゝまりてゆゝうなるゝハはるゝものゝゝ乃ハすはち
ハあれど後の數いゝばゝくもなゝゝいゝる射うれゝゝとれも
はゝんゝをゝゝうゝれるゝのゝすハ家せんゝのゝまひてもろ心
すいゝゝゞ彼ゝふ、ゝるどのをいみじゝく愛憐ゝゝまゝひはん
にのゝゝまゝふるゝれハゝけれ、十日十一日ゝなんゝゝ彼ゝる、
ゝゝみ系はゝとのゝう、皆ひるゐるひゝゐてものゝきり彼ゐてなん、

そそくいうゆさらしいがきぞ、きいの人よくでいとしての
めーうはうしけり、屏風の強そくぐもいと多のれどいうず、
きそしぼこうり。ふぐはしの一枝、ものを祝
朝がらけ雪みてうゆるる吉野山高やの枝の万に紙てきこうん
二月、さ九らみちるをあふまぐてたてり、
桜花荷てふるいうしまわ忘れてうゆ代のうめーに
三月うゆ、そくみ咲うるを人をきり、
三月きにきるてふ梅の花雪打てかざーん夜ごぐひう
四月 初をもうす
時ゆきちるうひの忍びきるいまぐろ万ねうも わぐろ
うれうり

五月、菖蒲ふくいうへう、時ゆなけり、
鮮立てくふしも昭八郎ひゆめちるぐさつき屋なうくうん
六月、被へきうり
身禊する川をみ屋のほくれがらせの新をうつてぐうゆ
七月七夕、うれぐきつれる家うく
雲もちくく空澄うる天河ゆや義星舟うくにうん
八月、きうが船うり、花元をせん載けりう、
おもれてほりうきぐうみ女郎花露をんをおこでひうれう
九月、白菊が月くくうる家をうゆ
時なうれるうや人の四ふうん紅葉うけくる赤うまの花

十月、もみぢいと面白き中をゆくに、姿うく社ばあるべきこそ、

枝人よりこれを面白めさなんや　下とも

十月　云云此詞書

よろづ代を入て来てうくん　とをもらせり　神あそび　ひとのあなどの　あめぐし

十二月、山々雪いとこまやかにふる、家々女なべのめてかをり、

雪深くつもりて人山にふりけへてゐる人みなまろのれ

此枝乃

ハナ坂をこえてときこゆるなべなきばつてをのぼれ信濃も

なべれんさとるひろ〳〵面しろく池の清みやうなるに、

雑所　初冬　乗人ども　舟のりてあそびわたるハいみじ

うおもしろしてんと人ハ居あり海まで行こうり、九の大い

どよれいしまかづく物なん数しらぬどのこけふ中ニも

りも大うち長十のうちひけるまり所へハ宮ゐる

なるち、藤人も皆物乃んとて迎ヘ納言なちまち

うけうちもやみてめでうし、日ひとるあそびとして、

るハて、物かけてきうんで所ふく物ゐのづけうちハぬ者

なしやんごとれなうにハ物おろうもかろへてきまつり、

九乃大いどの、中納言参りいとかしこう言二つ、世そう

名ぶかき筆の跡をきりてまへの人々うきが

ひてものうづけくまもれ、猶佩せきを勢くまふ、きちぜんのきくり、
けるすぼのりハ、家わかるふやうにきくきて、完くまひくれば、
いと月やきくきくわ、こるるぞのりうぐめたてきつ
りあまもひて、わくくまり形るるる、女夫、かくきくまふ、
をいとう社しやきやえくまふ、大和いとくのひきて
わぐす